

サムライ留学生の恋



はじめに

明治新政府は近代国家建設のために欧米の先進知識と技術の導入が急務であるとして、向学心に燃える若者たちに海外留学を奨励した。これに応えて海を渡ったのは、新たに「華族」という社会の上層階級に組み込まれた旧大名や公家をはじめ、旧幕臣や諸藩士およびその子弟たちで、ほとんどが前時代にそれなりの教育を受けてきた者たちであった。

彼らの海外留学のピークは明治三年（1870）から同四年にかけてで、その数は三百五十人から三百六十人にのぼったという（『近代日本の海外留学史』いしづきみのる石附実）。留学先としてはほとんどがイギリス、ドイツ、フランス、アメリカなど当時の先進諸国で、中でもドイツへは医学や兵学を志す者たちが競うように向かった。

生まれて初めて島国を飛び出し、異国の地を踏んだ若者たちはたちまち、現地現地の学術、文化レベルの高さに衝撃を受け、何としてでも新知識を吸収して祖国の発展に寄与するのだと意気に燃えながら学業に励んだ。

その一方で、慣れぬ異国暮らしに不自由さや心細さを覚え、遠い祖国を思い出しては人

恋しさを募らせる者も少なくなかった。そんな時、多感な青年たちの前に、やさしく声をかけ、親切に手を差し伸べてくれる女性が現れば、心を奪われたとしても不思議はない。

筆者が最近読んだ『ひとり白虎』（植松三十里）という小説にも、留学生の恋の話が登場した。主人公は飯沼貞吉という元会津藩の白虎隊士で、戊辰戦争の際、仲間たちと自刃を図るが、思いを遂げられず、たった一人生き残った実在の人物である。やがて傷も癒え、体力を回復した貞吉は怨敵長州藩士の庇護を受けるなど、数奇な運命をたどり、明治三年、駿府（現静岡市）に移った徳川宗家の創設した静岡学問所に入所する。ところが学校の雰囲気には馴染めず、思い悩んでいたところ、ある日、隣接する静岡藩病院長の林研海と出会う。林は貞吉の境遇に深く同情し、次なる進路について助言を与える中で、若き日のオランダ留学時代のこんな体験談を披露した。

「私はオランダに六年いたが、向こうで苦勞した。最初は医学校の勉強についていかれなくて、焦るばかりだったし、友人もできずに孤独だった」

「ならば、先生は」

さらに遠慮がちにたずねた。

「どうやって、そこから抜け出されたのですか」

「聞きたいか」

「聞きたいです」

「中略」

研海は少し照れたような顔をした。

「女がいたんだ」

「オランダ人の？」

「そうだ。こんなことを言うと言われるかもしれないが、彼女といると心が安らいだ。「中略」彼女に会うまでは、人の情けなど受けられるかと強がっていた。それが変わったんだ」

「その女の人は？」

「帰国の時に別れてしまった。支えてくれたのに、そんな仕打ちをして、今も申しわけなかったと悔んでいる」

林がオランダ滞在中に、現地女性とわりない仲となり、帰国時にその女性と別れ話をめぐってひと悶着あったのは事実のようである。彼は幕府派遣の留学生という立場を考え、

帰国時までには女性関係を清算しなければと焦ったのだろう。

林ら当時の留学生たちが育った社会は、武士道という独特の倫理観、道徳観によって行動が厳しく律せられていた。男女関係においても、家と家の結びつきが優先されたため、自由に恋愛することは許されず、それどころかサムライとして女性にうつつを抜かしていると見られるのは、恥ずべきこととされた。会津藩では藩校日新館へ入学前の六歳から九歳の子供にも「戸外で婦人（おんな）と言葉を交えてはなりません」（『日新館童子訓』松平容頌）と教え込んだほどである。

ところが渡航した先は日本とは異なり、制約の少ない社会で、女性も自分の考えや感情をはっきりと表に出し、個人の責任において行動した。それは常に男性より一歩下がり、忍従や犠牲の精神を美德とする日本女性の生き方とは対極にあるもので、留学生たちも初めは戸惑いつつも、日が経つにつれ、彼女らこそが人間らしい「近代女性」であるとの思いを深め、恋に落ちる者が相次いだ。

明治の早い時期に欧米諸国へ渡った「サムライ留学生」と現地女性とのラブロマンスが最も多く生まれたのはドイツといわれている。そのドイツでのケースといえば、わたしたちが真っ先に頭に思い浮かべるのは自伝風小説『舞姫』で、エリスとの悲恋を描いた旧津

和野藩（現島根県）出身の森鷗外だが、そのほかにも駐独公使、駐米大使、外務大臣などを歴任し、日本の近代外交の礎を築いた一人とされる青木周蔵、「日本の毛織物工業の父」と呼ばれた井上省三、「日本の林業の父」と呼ばれた松野礪ら旧長州藩出身の三人組や、「日本の薬学の父」と呼ばれた旧徳島藩出身の長井長義、製紙技術者として活躍した旧土佐藩出身の山崎喜都真、旧松江藩出身の物理学者北尾次郎など錚々たる人物がおり、さらに皇族の北白川宮能久親王という変わり種もいる。

イギリス人女性とのケースでは、長州藩士高杉晋作の義弟の南貞助、山城国の郷士出身で、日本人の国際結婚第一号とされる尾崎三良、近江国の僧侶の息子で倒幕運動に奔走した三宮義胤、旧土佐藩士の子息で、男爵イモの開発者川田龍吉、最後の伊勢・津藩士の嫡男藤堂高紹らがいる。

またアメリカ人女性とのケースでは、旧信州上田藩主の弟の松平忠厚、旧松江藩出身でカール・マルクスに会った唯一の日本人とされる飯塚納、旧盛岡藩士の家に生まれ日本人の精神風土を論じた『武士道』という著作で知られる新渡戸稲造、旧二本松藩士を父に持つ国際的歴史学者の朝河貫一らがいる。このほか旧加賀藩前田家の御典医の息子で、タカジアスターゼやアドレナリンを発見した化学者の高峰讓吉もこの国の女性と恋に落ち、結婚しているが、それはイギリス留学を終えて帰国し、改めて渡米した時のことである。

今の世なら、日本人と外国人との恋愛や結婚はとりたてて珍しいことではなく、日常的にそうしたカップルを街で見かける。だが時は一世紀半も前のことである、長崎、横浜、箱館などの港町や東京に暮らす者を除けば、大半の日本人にとって外国人を目にする機会などなく、まだまだ「異人さん」は珍しい存在であった。地方に暮らす者であれば、なおさらである。

こんな話がある。イギリス人の女性旅行家イザベラ・バードは明治十一年（1878）五月に来日し、北日本各地を巡ったが、彼女の足を踏み入れたほとんどの地域で、住人たちはそれまで外国人に接したことがなく、無遠慮に好奇の視線を彼女に浴びせたという。たとえば旧会津若松城下（現福島県）のはずれを通過した時のことを彼女はこう記している。

外国人がほとんど訪れることもないこの地方では、町のはずれで初めて人に出会うと、その男は必ず町の中に駆けもどり、「外人が来た！」と大声で叫ぶ。すると間もなく、老人も若者も、着物を着た者も裸の者も、目の見えぬ人までも集ってくる。宿屋に着くと、群集がものすごい勢いで集ってきたので、宿屋の亭主は、私を庭園の中の美しい部屋へ移してくれた。

青木周蔵らのように幕末、藩から洋学修業のために長崎へ派遣され、欧米人教師のもとで学んだ者であれば、外国人アレルギーも多少希薄になっていただろうが、大半の留学生は外国人との接触機会もほとんどないまま、日本を離れた。

そんな彼らも留学先の地で、髪や肌、目の色、言語、生活慣習、宗教などの異なる女性によもや心を奪われるようになるとは、考えもしなかったはずである。ある留學生の母親は、現地の息子に、くれぐれも青い目の女性を連れて帰って来ることなどなきよう、戒める手紙を書き送ったりもしている。

だが彼らの中には旧習の呪縛から解放され、カルチャーギャップをものともせず、異国女性との交際に突き進んでいく者がいた。その行動力はまさに青年ならではの怖いもの知らずで、「愛に国境はない」を地で行くものだった。とはいえ、やがて結婚という話が持ち上がると、双方の親族や周囲の者からさまざまな懸念や反対論が噴出し、当人たちの前に立ちほだかった。

本書では明治の初期、ドイツ、イギリス、アメリカに留学し、現地女性と恋に落ちたサムライ経験者、もしくはサムライの血をひく者たち九名を取り上げ、彼らが留学先でいかにして現地女性と出会い、いかなる交際を経ながら親密な関係を築いていったかをたどり、その結末を紹介する。同時に欧米の地に芽生えた日本人と現地女性との恋愛や結婚について、当時の欧米社会と日本社会はそれぞれどのように反応したのか、男女関係から見た異文化衝突の実相に迫ってみたい。

本書で引用した史料については、原文による紹介を原則としたが、そのままでは理解しにくいと思われる箇所もあるため、筆者の責任で、カッコ内に現代語訳や注釈を加えたり、要約した語句を挿入した。また旧漢字を新漢字に、カタカナを平仮名に替え、適宜、句読点やルビを付したことをお断りしておく。

また煩雑さを避けるため、本文内で用いた書物の著訳者や登場人物の敬称は省略した。

はじめに 2

第一章 ドイツ女性との恋

13

*青木周蔵とエリザベート・フォン・ラーデ 15

*北白川宮能久親王とベルタ・フォン・テッタウ 40

*井上省三とヘードビヒ・ケーニツヒ 57

第二章 イギリス女性との恋

75

*川田龍吉とジェニー・イーデイ 77

第三章
アメリカ女性との恋

*尾崎三良とバサイア・キャサリン・モリソン 106

*藤堂高紹とエリーナ・グレース・アデイソン 121

*松平忠厚とカリィ・サン普森 139

*新渡戸稲造とメリー・パターソン・エルキントン 166

*朝河貫一とミリアム・キャメロン・ディングウォール 192

おわりに 224

サムライ留学生の恋
熊田忠雄・著

発 行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定 価：本体 1,700 円 + 税

発売日：2020 年 7 月 15 日

ISBN：978-4-7976-7386-9

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)